FRONT LINE
文学部 2
Faculty of Letters

領域を超えた深い学びと複眼的思考を育てる 文学部の新授業

13専攻に触れるオムニバス形式の授業

学びのパスポートプログラムの必修科目「文学部の基礎／学びの基礎演習(1)B」*とは

文学部には学問分野を異にする13の専攻と、2021年新設の1プログラムがあります。その新設プログラムである「学びのパスポートプログラム」の1年次の必修科目「文学部の基礎／学びの基礎演習(1)B」は、あらかじめ設定した共通テーマについて各専攻から一人の教員が出て講義を行うオムニバス形式の授業です。昨年度のテーマは「病気・災害と社会」。社会が直面している喫緊の課題について考えるにあたり、多様なアプローチの仕方があることを学びました。毎回、授業の最後には教員が示す課題に応じた小レポートの提出が求められ、その結果を踏まえた総評がmanaba(全学授業支援システム)を通してフィードバックされます。授業を取りまとめるコーディネーター役の教員もおり、文学部の特徴でもあるきめ細やかな教育が実践されています。13専攻に幅広く触れながら視野を広げることができるこの授業は、2022年度も後期に同じテーマで開講される予定です。

＊本科目は2021年度以降入学生対象の科目です。

13専攻の教員が共通テーマを基に週替わりで講義
【2021年度のテーマ:病気・災害と社会】

第1回	イントロダクション
第2回 国文学	江戸の大変と情報 (鈴木俊幸 教授)
第3回 英語文学文化	文学は病気や災害をどう描くのか ——アメリカ文学の場合 (中野学而 准教授)
第4回 ドイツ語文学文化	細菌学と人種主義 ——戦前ドイツの結核をめぐる議論から(磯部裕幸 教授)
第5回 フランス語文学文化	文明災の時代における自律 ——フランス思想から、災害と疫病を読み解く(田口卓臣 教授)
第6回 中国言語文化	武漢の都市封鎖と作家の社会的役割 (飯塚容 教授)
第7回 日本史学	記録された災害史 —地震・噴火と日本列島の社会— (西川広平 教授)
第8回 東洋史学	災害と病気の関係史 (妹尾達彦 教授)
第9回 西洋史学	西洋近現代における病気と社会 (石橋悠人 教授)
第10回 哲学	疫病をしずめる神、仏、異類 (大川真 教授)
第11回 社会学	私たちの社会で病いや障害をもって生きるということ (天田城介 教授)
第12回 社会情報学	情報の伝達とその信憑性 (宮野勝 教授)
第13回 教育学	病気・衛生問題への対応からみる学校観の変遷 (高木雅史 教授)
第14回 心理学	災害後の心理支援 (山科満 教授)

授業対談

問題を多角的に捉えるために専攻の枠組みを超えた新授業

文学部の基礎／学びの基礎演習(1)B

学びのパスポートプログラムの1年次の必修科目であり、文学部の13専攻の学生も自由に履修できる「文学部の基礎／学びの基礎演習(1)B」。13専攻から一人ずつ教員が出て共通テーマの講義を行う、文学部ならではのこの特色のある授業について、昨年度コーディネーターを務めた日本史学専攻の山崎圭教授、英語文学文化専攻の中野学而准教授、そして、昨年度この授業を受けた学びのパスポートプログラム(以下、まなパ)2年の柴田紗羽さんの3人が対談しました。

社会が直面している課題に多様な視点でアプローチ

山崎　柴田さん、まずは1年間、文学部で学んでみていかがでしたか？ まなパで多岐にわたる分野について横断的に学修する中で、自分が究めたいテーマは見えてきましたか？

柴田　もともと児童心理に関心を持っていたので、心理学についてはもっと深く学んでみたいと思っています。一方で、社会学や美術史にも興味が出てきました。学びたいことが増えてまだ研究テーマを絞り込めずにいる状況ですが、視野が広がったと前向きに捉えています。

山崎　「文学部の基礎／学びの基礎演習(1)B」の昨年度のテーマは「病気・災害と社会」でした。地震や津波といった自然災害や新型コロナウイルス感染症の流行といった問題が身近にあるからこそ選んだテーマですが、中野先生はこれにどう向き合ったのでしょうか？

中野　私の専門分野は英語文学文化なので、「文学は病気や災害をどう描くのか――アメリカ文学の場合」と題して講義を行いました。その背景には、現在のアメリカ自体が、人種差別や経済格差といった〝病気〟を抱えているという前提があります。新型コロナウイルス感染症や自然災害といった表面的な問題だけでなく、文明の在り方そのものに〝病気〟が潜んでいることを学生の皆さんに伝えたいと考えました。

柴田　中野先生の授業で取り上げられたカミュの「ペスト」がほかの先生の授業でも取り上げられていたことで、文献や歴史から学ぶことの意義を教えられました。

山崎　中野先生の授業は、英文のテキストを読み込みながら考察を深めるスタイルでしたよね。ほかにも柴田さんの心に残っている授業はありますか？

柴田　フランス語文学文化（田口卓臣先生）の授業は、普段なら自分が履修しない分野だったので印象に残っています。社会学（天田城介先生）の「私たちの社会で病いや障害をもって生きるということ」というテーマの授業では、マイノリティがマジョリティに合わせるのが当たり前とする思想が無意識のうちに社会に浸透していることに気付かされました。

山崎　毎回、異なる専門分野の考え方に触れられるのは刺激的だったことと思いますが、混乱することはありませんでしたか？

柴田　「病気・災害と社会」という一つのテーマが軸になっていたので、混乱するこ

文学部准教授
英語文学文化専攻
中野 学而（なかの がくじ）

文学部人文社会学科
学びのパスポートプログラム2年
東京都立調布南高等学校出身
柴田 紗羽（しばた さわ）

文学部教授
日本史学専攻
山崎 圭（やまさき けい）

とはありませんでした。むしろ、授業を重ねるごとにそれぞれのアプローチの中に共通点や相違点が見えてきて、自分の視野が広がっていくのが感じられて楽しかったです。

教員に質問する力も重要

山崎　柴田さんはこれから自分の研究テーマを見つけていくわけですが、この授業を通して自分の研究の参考になりそうなヒントは得られましたか？

柴田　もっとたくさんの本を読みたいと思うようになりました。また、さまざまな専門の先生方に質問をしたいという気持ちも生まれました。自分自身で考える力に加え、先生方に教えを請う積極性も身につけていきたいと考えています。

山崎　日本史学専攻には原始・古代から近現代まで異なる時代を専門とする7人の教員がいます。たとえば江戸時代に興味を持ったら、その時代を得意とする先生に話を聞きに行くよう学生には伝えています。気軽に研究室のドアをノックできるのが、文学部の良さだと思いますよ。

中野　そうですね。学生から質問を受けるのは非常にうれしいです。ちなみに、柴田さんは教員に質問してみたことはありますか？

柴田　はい。心理学の山科満先生に、manaba（全学授業支援システム）を通じて質問させていただきました。山科先生は大変丁寧に返答してくださり、学生と一緒に考えてくれる先生がいることがとてもありがたかったです。今度は直接先生をお訪ねして質問してみたいと思います。

中野　はい。ぜひいろいろな先生の研究室のドアをノックしてみてください！

小レポートと総評で考える力を養い学びを深める

山崎　授業では教員と学生、双方向のやり取りでテーマへの理解を深めるべく、毎回教員が示す課題に応じた小レポートを学生に提出してもらい、そのフィードバックとして教員が1週間後にmanabaを通じて総評を返すという形を取ってきました。それぞれの教員の総評はどれも興味深く、たとえばドイツ語文学文化の磯部裕幸先生による授業「細菌学と人種主義―戦前ドイツの結核をめぐる議論から」では、昨今のコロナ禍が社会の分断をもたらしたかどうか、それについてどう考えるかを問う課題が出されました。それに対する磯部先生の総評には、「案答の中には感染者と非感染者の間の分断を取り上げるものが多く、ステイホームや時短営業をする人としない人との間で亀裂が見られる等の意見があった。国際社会においても、トランプ前米大統領がコロナウイルスをチャイナウイルスと発言したことや、ヘイトクライムが発生していることへの指摘もあり、社会でさまざまな分断が生じていることが浮かび上がった。また、分断や亀裂が見られる一方で、隣人愛や相互扶助を大切にする精神も見られるとの答案もあった。この点に希望を見いだし、地に足の付いた楽観主義への道を模索していきたい」との趣旨が書かれていました。学生の小レポートに書かれた意見を集約しながら、社会の分断の在りようを整理し、今後の展望につなげる――。まさに、学生と教員のキャッチボールを通じて思索が深まる好例ですね。

中野　実は、小レポートに対して教員が総評するというのは私のアイデアだったんです。先生方が一生懸命書いてくださったおかげで、総評そのものが大変面白い読み物になったと感じています。教員自身も学びを得られる良い機会になりました。

山崎　中野先生は学生の小レポートを読んでどのような感想を持たれましたか？

中野　アメリカはメディアで取り上げられる機会も多く、日本から見ると他国に比べてなじみのある国だと思います。学生も自分なりのアメリカに対するイメージをすでに持っていたと思いますが、文学作品を通すことでアメリカの人種問題の根深さが学生にしっかり伝わったと実感できました。人種問題を対岸の火事と見るのではなく、自分たちにも通じる問題だと捉えてくれた学生が多かったこともうれしかったです。

山崎　柴田さんは、書くのに苦労した小レポートはありましたか？

柴田　与えられたキーワードに沿って書く小レポートには苦戦しましたが、だからこそ考える力が養われて勉強になりました。たとえば、西洋史学の石橋悠人先生の「西洋近現代における病気と社会」の小レポートは「検疫」がキーワード。これまで自分が西洋の視点から物事を考える経験がなかったこともあり、書く際にはいろいろと考えさせられました。大変だった分、楽しかったです。

さまざまな学びから自分の道へ

山崎　最後に、柴田さんの今後の学修の展望についてお聞かせください。

柴田　私はまなパの1期生で先輩の前例がないため、ゼミに入るべきかも含め、どう進んでいけばいいのかまだ模索中です。まなパの環境を最大限生かして、自分が深掘りしたい研究テーマにアプローチしていければと考えています。

山崎　大学は学ぶべきことが決まっている場所ではなく、学びたいことを探して学ぶ場所です。どう学べばよいか迷うのは当然のこと。「文学部の基礎／学びの基礎演習(1)B」で一つの問題に対してさまざまなアプローチがあることを知ったように、今後の学びの中で自分に合う道を見つけていってほしいです。

中野　好奇心を失わず、是非頑張ってください。

柴田　ありがとうございます。頑張ります！